日本ロレンス協会ニューズレター　No. 44

2023 年 4 月 23 日

日本ロレンス協会 会長　石原 浩澄
副会長　木下 誠

第 54 回　全国大会のお知らせ

新緑がまぶしい時季となりました。会員の皆さまにおかれましては、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。当初の予想を大きく外れ、ことのほか長引くこととなりました今次の新型コロナウィルスの感染拡大でしたが、それもようやく落ち着きを見せ始め、感染対策に伴う各種の規制も緩められ、コロナ禍以前の生活を各方面で少しずつ取り戻しつつあるようです。われわれ日本ロレンス協会におきましても、4 年前に慶應義塾大学で大会を開いて以来、「次は高知でお会いしましょう」の合言葉を繰り返してまいりましたが、先の事務局からの一斉メールで概略をお伝えしましたように、今年こそは、会員の鳥飼真人氏の尽力も得まして、高知県立大学にて（オンラインも併用する形で）開催できる運びとなりました。以下、簡単に概略をご案内申し上げます。

今年度の大会（第 54 回）は、6 月 17 日（土）高知県立大学永国寺キャンパスにて開催いたします。開会宣言に続きまして、2 つの個人研究発表、シンポジウムひとつ、総会とそれに続く交流会を予定しています。

まず、研究発表です。今大会は、古城輝樹氏（東京大学大学院）の「Posthuman Bildungsroman としての *Sons and Lovers*——芸術家と星の影響をめぐって」と題する発表で幕を開けます。「教養小説」と訳されることも多い“Bildungsroman”という視点からロレンスの *Sons and Lovers* が論じられることはこれまでもありました。プログラム記載の梗概に詳しいように、Bakhtin の議論を導入的に援用しつつ、「星」の象徴性に着目し、“posthuman”という視座から Bildungsroman としての *Sons and Lovers* という作品の新たな読みの可能性を探ろうとする斬新な試みのようです。司会は熊本大学教授の新井英永氏です。

続いての研究発表は星久美子氏（愛知学院大学教授）によるものです。タイトルは「ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を「バイオフィクション」として読む」。新しいジャンルとして確立されつつある「バイオフィクション」に着目する星氏は、いわゆる伝記としてのバイオグラフィとは異なるバイオフィクションの戦略・特徴を紹介しながら、ロレンスを「伝記対象」としたヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』を論じられます。ロレンスの伝記とフィクションにどのようにアプローチできるか、新たなジャンルへの向き合い方を聴衆も共に考えることのできる機会になることと思います。ロレンスの伝記にも詳しい中林正身氏（相模女子大学教授）の司会によって進められます。

個人研究発表に続きまして、福西由実子氏（中央大学教授）の司会により「1900-30 年代

のモダニズム雑誌と越境者たち」と題してシンポジウムが開催されます。当企画が実現するに至りました経緯についてはプログラムに記載の要旨の中で福西氏が触れられていますが、「雑誌メディアとロレンス」というテーマには関心を寄せられる会員諸氏も多いのではないかと思います。今回は、20 世紀初頭の雑誌メディアを軸に、講師それぞれの関心から当時の文芸事象にアプローチされます。ロレンス以外の人物に焦点が当てられることで、聴衆の（ロレンスへの）関心も、比較へ、あるいはより広いコンテクストへといざなわれるのではないでしょうか。

加藤彩雪講師（大妻女子大学専任講師）は、雑誌 *The New Age* と、南アフリカ育ちの Beatrice Hastings を取り上げられます。20 世紀初頭のイギリスという地における、女性、アウトサイダーとしての「主体」と雑誌という問題に切り込まれるようです。大山美代講師（近畿大学特任講師）の関心は、アメリカのモダニズム文芸誌で活動したオランダ人作家の Emmy Veronica Sanders です。Sanders の詩作を論じながら、作家・芸術家と文芸誌との関係にも関心を向けられるようです。司会も務められる福西講師は、1930 年代にイギリスに移り住み活動したユダヤ人芸術家・ジャーナリストたちと、モダニズム文芸誌との関係に注目されます。さらには、そうした「モダニズムの越境者」たちのその後の動きや、第二次大戦前後期の「イギリスの representation」などにも言及されていきます。

このように刺激的な議論を予感させてくれるシンポジウム企画である一方で、福西氏も要旨の中で触れられているように、願わくは今回のシンポジウムに触発されて、第二第三の同種の企画が立ち上がることを期待できればこの上ありません。

シンポジウムの後に総会を開催いたします。総会に続きまして、交流会を計画しています。コロナ禍以前には、懇親会の形で交流を図って参りましたが、協会としての飲食を伴う懇親会は今年度までは見送ることといたしました。感染症対策の各種制限が撤廃されつつあるとはいえ、今次の感染拡大に対しましては、それぞれの受け止め方にも違いがあろうかと思います。次年度以降は通常の形に戻せるのではないかと思っていますが、今回の取り扱いにつきましては何卒ご理解を賜りたく存じます。昨年度は、「オンラインで」交流会を行ないました。「ブレイクアウト・ルーム」に分かれて、いろいろお話されたことをご記憶の方も多いと思います。今年もまた初めての試みとなりますが、この間直接話をする機会のなかった会員相互間の交流を図ることが主たる目的です。何人かの皆様には話題提供をお願いしたいと思いますが、多くの皆様にもこの間に積もったお話をいただければと思っています。もちろん、参加は任意です。お時間が許せば、多くの方にご参加願えればと思います。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

以下、協会事務局よりいくつかのお願いと報告をさせていただきます。

1．対面での大会を再開するにあたりまして、各自必要と思われる適切な感染対策を行なってください。会場をお借りしています高知県立大学からも、適切な感染対策を実施するとともに、感染の拡大状況においては開催形態の再検討を行うことを条件として、会

場の使用許可を得ています。執行部におきましても、適宜、換気等の対策をとって参りますが、会員の皆様におかれましても、対策を心掛けていただきますようお願い致します。なお、会場の教室内では飲食（蓋つきの飲み物を除く）は禁止です。あらかじめご承知おきください。

２．会費納入は同封の郵便振替用紙をご利用ください（手数料は協会負担）。会費は、一般会員は 5,000 円、役員は 10,000 円（但し顧問と退職した役員は 5,000 円）です。永久会員の制度があります。詳細についてはホームページ（http://dhlsj.jp/dl/syushin.pdf）をご覧いただき、ご活用ください。

３．同封の会員名簿の住所、所属、e-mail、電話番号等に変更がある場合は、同封の返信葉書でお知らせください。

４．専任職に就いておらず、かつ公的な機関から研究費を受け取っていない日本ロレンス協会会員に対して、日本ロレンス協会大会で研究発表（シンポジウム講師等の担当を含む）をする場合、協会で旅費・宿泊費の補助を行う制度があります。詳細については協会ホームページをご覧いただき、ご活用ください。

それでは、みなさま、高知で（もしくはオンラインで）お会いいたしましょう。